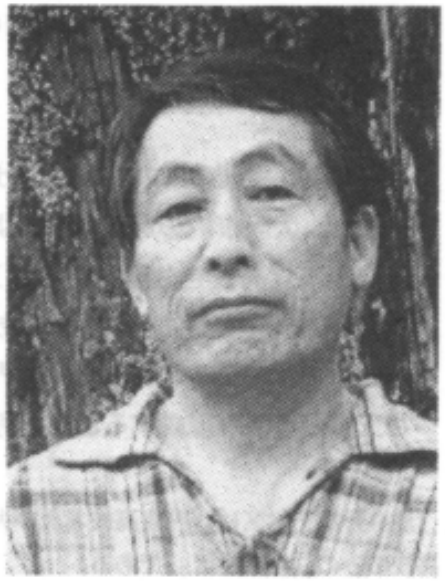
エクスカーション参加の想い出

石井寛治



私が地理学を専攻して３回生の時に初めて実習旅行に参加、そして翌年にも参加させていただきました。

３回生（昭和37年）の時の目的地は兵庫県西播、相生市・赤穂市であった。当時相生市は石川島播磨重工の造船業中心の企業城下町として、赤穂市は瀬戸内地方随一の工業的製塩業（赤穂塩業組合による流下式製塩法）の中心地であったが、今日ではいずれも見る影もなく、昔日の観がある。

この時の指導教官は藪内芳彦教授であった。この時は何分初体験だったので、正直云ってエクスカーションとはいかなるものか充分理解をしないまま現地入りして、多分に物見遊山的な気持ちで参加した。ヘルメットを着用しての造船工場と製塩工場の見学と、赤穂御崎近辺の浄運寺見物が印象に残っている。そしてその成果としての「赤穂市の観光について」と題する、小レポートを苦心して作成し提出した事を覚えている。

そして４回生（昭和38年）の時には渡辺久雄教授の指導の下、鳥取市近郊の農村と花賀露漁港が調査対象であった。この時はさすがに２度目の参加ということもあって、調査地及び調査対象として、鳥取市南部津ノ井（当時は津ノ井村？）という集落の内、地形的に対称的な２つの平野部と山間部に位置する集落で（集落名はその内の一つが紙子谷（カゴタニ）他の一つは失念）あらかじめ作成しておいた調査表に基づき、各家を訪問して聞き取り調査を行った。調査結果は同じくレポートにした。

この時の調査で得た結果で覚えているのは、水田を主たる農地としている集落でも、殆どが兼業農家で、しかもいわゆる三ちやん農家であって、主たる労働力は一家の主人夫婦とその祖父母であったこと。

そして山間部の集落は梨栽培を中心とした園芸農家であって、単位面積当たりの収益は園芸農家の方が多かったように記憶している。又、この時訪れた選果場で、コンベアに載せられて選果中の梨を頂戴した。その梨の何と美味しかったことか、これは忘れられない想い出の一つである。

いずれの実習旅行も、学生・院生併せて10名前後だったと記憶するが、夫々テーマ対象毎にグループ又は個人で別行動をとって調査にいそしんでいた。私は未だに当時の調査資料の一部、パンフ・地図の類も手元に残している。時たま、何気なくこれらを手にする折、当時のことが頭に浮かぶ。とりわけ鮮明に憶えているのは、毎夜夕食後、その日の報告を兼ねたフリートーキングの場である。勿論、当時皆が何を話し、どんな事を討論したか記憶に残っていないけれど、あの当時のあの場、あの雰囲気だけは何故か今でもおぼえている。殊にこの地の、確か「砂丘荘」という名の宿舎であったと思うが、今ではその存在も、又その名もすでに過去のものとなってしまった蚊帳張りの大部屋で、私たち実習生と共に語り明かされたこと。当時鳥取大・岩永実先生の鳥取砂丘や湖山池の成り立ち、伝説に付いてのお話と、聞かせていただいた、民謡「貝殻節」は共に終生忘れがたい想い出となっている。

（昭和40年卒業）